



胆振西部医師会  
豊浦町国民健康保険病院

秀毛 寛己

最近、スマホでm〇.comなるサイトのクイズ回答が習慣化している。毎日2問。国家試験、各科診療、雑学、統計、専門医試験問題など画像、病理、内視鏡、データ含めて全科のジャンルからの出題である。驚くのは、最近の国試の内容だ。われわれのころは診断と治療内容（薬の名前等）のみ分かればよかった。「救急外来に、転倒して股関節部痛の老女が家人付き添いにて独歩来院。一般撮影異常なし。その後どうしますか？」といったような臨場感のある質問が試験に出るようだ。現実的に、「明日整形外科に行きなさい」でもいいと思うし、病院の診療の周辺状況（整形手術できるのかとか、ベッドは空いているのかとか、かかりつけは救急の病院と同じかとか）で対応は分かれてしかるべきだが、答えは「CTで異常がなくてもMRIでしか骨折の証明ができない場合を想定して、安易に投薬して帰宅させてはいけない」というようなものであったと思う。学生さんも大変だなと感じると同時に答えの解説に異議を唱えたいくなるような（現実の標準化を五折の一つに勝手に押し付けている）設問もある。

簡単な問題だなとスマホ画面のマークにタッチして、解答を見たら間違っていて、解説を見ると自分が選んだ内容なので、あれっと思いよく見たら指がずれたのか違うところにチェックが入っている。寝ぼけ眼で起き掛けの布団の中でやっているからだろうが、こういう日は何となく一日面白くない。考えてみたら医師国家試験もどういわけかうっかり一段ずれてマークを塗りそのまま解答を続け、最後に一行足りないのに気づき、しっかり鉛筆で塗りつぶしたところを消しゴムで必死に消してまた記入した冷や汗の出る思い出がある。ずれたまま提出した方が得点が多かったかどうかは不明だが。どういわけか昔から、書類記入とか計算とかまともに一回でうまくいったことがない。電卓も苦手で検算するたびに違う合計になって嫌になる。計算と言えば、くやしい思い出が2つ。

その成績で進学先がほぼ確定するという大切な県下一斉試験が当時あった。国語は日常会話ができる程度、社会、物理、化学はせいぜい2～3割がやっというレベルで必然的に英語と数学にしわ寄せがきた。英語は順調、最終日の数学も無難にこなして最後の設問となった。2つの図形の面積の和を求め

る問題で、片方は計算結果1/2を得た。もうひとつの求積結果も偶然1/2となった。これで目標クリアと安心して30分以上余った時間を見直し時間にあてた。その前の数学のテストで、腕時計が止まっていることに気づかず途中まで超余裕、その後全速力で必死に答案を書き続け時間切れ提出となったことを苦く思い出しながら、心地よい達成感を感じていた。そして終了時刻となり満を持して1/2+1/2=〇を記入した。ところがこの試験結果が後日報告され188点だったのでおかしいと思いチェックしたら、最終手前まで全問正解。最後の問題も論理の道筋と立式に誤りなく、足し算の答えが1/4で×となっている。やはり採点間違いだと思いホッとして訂正にいかうとした刹那、答えは1だここで雷に打たれたように初めて気づいたのだった。あとは、足し算もできない悔しさと恥ずかしさでただ声を上げて笑うしかなかった。二度目は教養2年後期末で、誰も解けなかった（らしい）一見複雑そうな量子場のエネルギー計算問題だが、極座標を用いれば簡単な微分方程式になって高校生でも解ける問題になったのに、最後の足し算を間違えてしまった（優はもらえたが）。この記憶に残る2つの足し算の間違いの後は数字の計算に悩まされずに済む道に進んだ。最近、長谷川式認知症スケールで100から7を2回引いた答えの質問に86以外を自信をもって答える被験者、アクセルを踏んでのにブレーキを思いっきり踏んだと主張する高齢者を見ていると、ベルクソン風にと考えると直観認識作用は同じ気がして自分のことのように感じる。

さて、外科医の時は引き算（病巣を取り去る）ばかり、北海道に来てからは掛け算＝九九（＝救急）がメインになっている。九九（＝救急）は計算不要の一種の歌詞であり、内科みたいに薬の難しい足し算もしないで済むから自分のような生来落ち着きのないあわて者でも何とかなっているのだろうと思われる。